

9 祈りとは

9-1 祈りとは

9-2 主の祈り

9-3 イエスの祈り

9-4 ヤベツの祈り

9-1 祈りとは

1、聖書は祈りについての書物と言ってよいでしょう。世界中のどの宗教も、祈りを否定しません。祈りなくしては宗教の名に値しないからです。それでは、聖書は祈りをどのようにとらえているのでしょうか。まず、多くのキリスト教会では、祈りを「霊の呼吸」としてとらえていることです。霊の呼吸は聖書の中には出てこない言葉なのですが、しかし、祈りの神髄をついています。呼吸は人間が生きていくために欠かせない、絶対必要なものです。したがって、祈りがなくなれば、霊＝信仰がなくなるとしているのです。人間に空気が絶対必要なように、信仰には祈りが絶対必要とするのです

「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。」(コロサイ書4：2)と聖書は命じています。聖書は、いつでも、どこでも、何度でも、間をおいた反復の祈りを要求しています。祈りはいわば、一日中することができ、することが要求されているのです。それくらい祈りは大切と位置づけています。しかし、祈りは中々大変なことは、キリスト教関係の書店にいても、祈りに関する本が山澄みされていることからわかります。聖書も祈りに関する箇所が多くでてきます。

2、同時に祈りは神との対話ととらえています。聖書は神と人間の契約を繰り返し述べていますが、契約関係の維持にはコミュニケーションが欠かせません。いたがって、神への祈りは、神との対話なのです。イエスは「あなたの父に祈りなさい。」(マタイ6：6)と言われました。「神」とは言わず、「父」なのです。父をイメージしなさいということです。神と人間関係を、自分の父との関係になぞらえて意識しなさいということです。

さらに、「アバ、父よ。」(マルコ14：36)との言葉もあります。この「アバ」とは、イエスの活躍の当時のユダヤ地方の(じつは2000年前でなく今も)小さな子が父を呼ぶ時の言葉といわれています。さしずめ、「おとうちゃん」と言う感じです。したがって、祈りは特別な行事でなく、日常ある自然のできごと、親しみある交わりなのです。

したがって、祈りの最初の言葉の多くは、「天のお父さま」「天の父なる神様」「愛する天の父なる神様」と神を自分の父になぞらえ、自分の父に話すごとく祈ることが許されてい

るのです。「御在天の主よ」といささか懐古調に言う老人の方もおられます。もちろん、ただ「主よ」と言う場合もありますが、これはこれで、親しみのある呼びかけとして、いいのです。

3、同時に祈りが会話ならば、自分の言いたい事だけを言いばなしでは正常な会話になりません。「**お話ください。しもべは聞いております。**」(サムエル第2：3・10) 初代イスラエルの王となったサムエルは少年時代の礼拝のとき神の声を聞くのです。ダビデもペリシテ人とき戦いのとき「主に伺った。すると主はダビデに仰せられた。」とあります。祈りは一方通行でなく、双方行です。

もちろん、直接神の声を聞くことができるとは限りませんが、常に待ち望む態度が必要でしょう。また、会話なら、声を出すのもよし、声を出さず静かに話す＝黙想するのもよいとされています。しかし、黙想はおおくの場合、お祈りでなく、おい眠りになるので、気をつけなければならないとは、教会の祈りの勇士（特によく祈る方々を教会ではこのように表現するときがあります。）の声です。

4、次に「**ハレルヤ**」という言葉があります。神を賛美します、仰ぎますと言う意味があります。このハレルヤは、万国共通の聖書の言葉です。現在数百に聖書は翻訳されているとは、前に話しましたが、このハレルヤだけは、翻訳なしの言葉なのです。もちろんお国により、発音の仕方が若干異なるのは当然ですが、しかし、殆どの国で分かるようになっているという、いわば不思議な言葉＝語彙になっているのです。

ある日本の伝道師がアフリカのある国にいったとき、飛行場で、待ち人を探すために、このハレルヤを叫んだところ、直ぐ相手の人にめぐり合えたと話しておられたが、まさに世界共通語の面目躍如なのです。ゴスペルソングでも、このハレルヤは大いにつかわれています。有名なヘンデルのメサイヤのハレルヤ・コーラスもあります。では、このハレルヤ、神を賛美するにはどうするですが、手掛かりに、詩篇にハレルヤ詩篇とよばれている箇所があります。詩篇第146編から150編をみてみよう。

「ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。

私のいきているかぎり、主をほめたたえよう。

いのちのかぎり、私の神に、ほめ歌を歌おう。」

(詩篇第 146)

「ハレルヤ。まことに、われらの神にほめ歌を歌うのは良い。

まことに楽しく、賛美は美しい。

(詩篇第 147)

「ハレルヤ。天において主をほめたたえよ。

いと高き所で主をほめたたえよ。」

(詩篇第 148)

「ハレルヤ。主に新しい歌を歌え。

聖徒の集まりで主への賛美を。」

(詩篇第 149)

「ハレルヤ。神の聖所で神をほめたたえよ。

御力の大空で、神をほめたたえよ。」

(詩篇第 150)

賛美は要は心一杯、神を讃える、神を褒めることでしょう。

5、しかし、祈りはなにか難しいものだ、どう祈ればよいかよくわからないというときはどうすればよいのでしょうか。次に聖書はどのように祈ればよいかわからないときに、聖霊の助けを求めることを教えています。

「聖霊もおなじようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによってわたしたちのためにとりなしてください。」(ローマ書 8 : 26) 聖霊が私たちの助け手として、私たちの祈りを助けてくれるということです。

とりなしとは、その人にかわってという意味がありますが、聖書の祈りは聖霊なる神にまかせなさい、と言うのです。ですから、他の宗教のように、祈りのための専門家(たとえば、祈禱師のような存在)は不要なのです。聖書の祈りは、老若男女、年齢経験の差を

越えてできるものとされています。

6、聖書の祈りの特徴は、聖霊による祈りとならんで、イエスの名による祈りが求められています。イエスは言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければだれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネ14-6)「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をおうけにためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしもそれをしましょう。」(ヨハネ14:13・14)

聖書を信じる人達は、祈りの最後に、必ず「イエスさまの名前で祈ります」とむすびます。かならず、イエスの名前が必要なのです。人間の祈りは、突き詰めれば自己中心の祈りなのですが、イエスが最後のむすびで、いままでの祈りはどのようなものであれ、イエスが父なる神にとりなして、すなわち代わってイエスが祈ります、と言う意味が込められているのです。したがって、イエスが祈りをささげているのとおなじことになるのです。

7、アーメンという言葉も有名です。このアーメンも先程のハレルヤとならんで、世界共通語です。アーメンはもともと、ヘブル語(ユダヤの言葉)で「まことに」とか「たしかに」とかの意味がある。また、神への感動の言葉であると同時に「そうなりますように」との願いが込められた内容にもなっています。したがって、教会の説教中や大きな集会に行くとこの「アーメン」がきこえてくることがあります。時にはやかましいくらいに。したがって、多数で祈れば、祈りの最後は、「イエスの名前で祈ります」に答え、「アーメン」と総和することになっています。

自分一人の祈りのときも、祈り終わったときに、「アーメン」と結ぶのが、習慣です。祈りの全部がそうなりますように、意味があるからです。聖書も、66巻の最後、ヨハネの黙示録で、最後の22章21節の最後の文(聖書の最後の言葉)で「アーメン」と結んでいます。聖書の全部の内容、言葉がそうである、神のたしかな言葉であるとの確認と、そうなりますようにとの願いがこめられているからです。

9-2 主の祈り

1、イエスに弟子たちが祈りをどうすればよいか、との問いにこうこたえられました。これが、プロテスタントの教会で唱えられている祈り、イエスの祈りを特に「主の祈り」と言われています。ただし、原文は現在でもなぜか文語体で書かれており、また教会でもこの文語体の文章を使用していますが、この箇所を私達の日常語である、口語体に言い換えてみます。マタイ、ルカの福音書にも口語体で書かれています。

1 「天におられます私たちの父よ。

御名があがめられますように。

2 御国が来ますように。

3 御心が天でおこなわれるように、

地でもおこなわれますように。

4 私たちの明日のための糧を今日もお与えください。

5 私たちも、わたしたちに負いめのある人を許しますから、
私たちの罪をお許してください。

6 私たちを試みに合わせないで、悪からお救いください。

7 国と力と栄えは、永遠にあなたのものであります。

アーメン」

(マタイ 6 : 9 ~ 13 ・ ルカ 11 : 2 ~ 3)

2、「主の祈り」は、3つの内容に分けられます。賛美、願い、告白です。1と7は賛美、2から4、6は願い、5は告白です。主の祈りは、賛美にはじまり、賛美に終わっていますが、イエスはこれは、祈りの基本とされました。「御名があがめられますように。国と力と栄えは永遠にあなたのもの」は最高の賛美の言葉です。他の宗教のみならず、聖書を信じる人においても、祈りは願いが中心で、これのみという場合もすくなくありません。

もちろん、願いも当然なのですが、聖書による祈りはまず、賛美だと言うのです。祈りが、神との会話あるいはコミュニケーションとすると、その対象である神への賛美や感謝が

まず、最初にくるのは、しごく当然と言えるでしょう。聖書はその点からいっても、神への賛美に満ちている書物と言えるでしょう。賛美なくして、祈りはありえないのです。日本人が神社仏閣で、「商売繁盛、家内安全」と手をあわせて、数秒間祈りの恰好をするのは、祈りの大切な部分を忘れているのです。なお、賛美については、すでに説明した箇所もありますので、参照してください。

3、次に祈りの告白について、みたいと思います。聖書全66巻の登場人物のなかで、もっとも、悲惨な体験をしたのは、ヨブでしょう。ヨブは、紀元前14世紀、ユダヤの大金持ちだったのですが、一瞬のうちに、妻を除く家族全員、財産の全ての失います。聖書のなかでも、もっとも難解な箇所でもある「ヨブ記」は、神を信じたヨブの叫びとも言うべき、告白が記録されています。

「あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。知識もなく、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。どうか、聞いてください。私が申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示してください。私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。」

(ヨブ記42：2～6)

また、4章のダビデについての箇所で、ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのち（姦通を犯した後）に、預言者ナタンが彼のもとに来たときの告白は以下のようなものでした。

「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐいさってください。

どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。

まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。

私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。」

(詩篇51：1～49)

告白は自分の罪を認め（聖書では一番大切なことと位置づけられるでしょう。）罪を悔い改めることを指します。悔い改めは、現在の自分の立場これをアイデンテティーと言いますが、ハッキリするのです。自分がなに者であるかこれが分かることが、自分の過去、現在、未来を知る上で非常に大切だからです。悔い改めのない信仰は存在しない、これも聖書の基本だとすでに説明しました。

4、願いについては、「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」「だれであれ、もとめる者は受け、捜す者は見つけだし、たたく者には開かれます。」（マタイ7：7・8）

聖書は聖書を信ずる人の願いについて制限していないということです。また「もし、からし種ほどの信仰があったら、この山に、ここからあそこに移れ。』といえは移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。」（マタイ17：20）

「神を信じなさい。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、「動いて、海にはいれ。」と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとうりになります。だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとうりになります。」（マルコ11：22～24）とイエスは言いました。山のように見えるおおきな問題であってもその解決ができるのだと。

「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神にたいする私たちの確信です。私たちの願うことを聞いてくださるといふこと知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るのです。」（ヨハネの手紙1：5－14：15）願うことはそれがすでになえられたと同じになる、すなわち願いの達成の先取りをして祈りなさいとも、聖書は言います。

なにになにしてください願うことは、その願いが達成されたと信じることだと言うのです。現世利益（げんせいりやく＝～してくださいと願うこと）の祈りについて、聖書的でないとする意見もありますが、聖書による祈りは、これ以上ない現世利益を願うことができ

る、とされる先生もおられます。現世利益OKなのです。聖書の祈りは、なんとダイナミックなんですか。

しかし、聖書の願いの祈りのなかで、イエスは基本的な心構えについて述べています。
「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。・・・しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要なことを知っておられます。だから、神の国と神の義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらものはすべて与えられます。」(マタイ6：31～33)

聖書の神は現実的で、实际的です。我々が願っている、衣食住のみならず、人間の欲する願望などすべて分かっているのです。最も大切なことを願いなさいとすすめています。目にみえる世界やすぐ来る世界でなく、今は目に見えないが、やがて確実にくる永遠の世界、の神の国を求めなさいとすすめるのです。

9-3 イエスの祈り

1、イエスは祈りの人でした。イエスが30歳になり、公的生活と言われた最初にしたのが、40日40夜の祈りでした。しかも断食で。(マタイ4:2)そして、十字架上で、息をひきとられる直前まで、祈り続けられました。(マタイ27:46)イエスは祈りで始められ、祈りで終わられたのです。文字どおり、祈りを「呼吸」としていたのです。

まず、40日も断食できるかどうかですが、医学的には、人間の限界であるといわれています。お隣韓国はキリスト教の世界でも、この祈り、特に断食祈禱(断食して祈る)の激しいことで有名です。徹夜断食祈禱をして、それから会社の出勤される方がざらにいらっしゃるとききましたが、この40日断食にチャレンジされる方がおられるそうです。体験談を読み聞きますと、生死のぎりぎりの経験だそうです。

40日近くなると、水すら飲めなくなるそんな体の変調をなるらしく、まして、冷静に祈りなど人間の力では到底無理があり、大変な力がある、と仰っていました。イエスのみ冷静にまた熱く祈れたのでしょう。イエスは「いつも油断せずに祈っていなさい。」(ルカ21:36)と命ぜられました。自らそれを実行したのです。イエスはいつでも、どこでも、何度でも祈られたのです。

2、4つの福音書には、イエスの祈りの記事がよくでてきますが、公的生活の最初、「イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。『あなたは、わたしの愛する私の子、わたしはあなたを喜ぶ』」(ルカ3:22)と三位一体の神、父なる神、聖霊なる神、イエスの交流がえがかれています。

イエスはいつでも、どこでも祈られた。「イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しいところへ出て行き、そこで祈っておられた。」(マルコ1:35)「イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。」(ルカ6:12)「イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。」(ルカ5:16)

十字架の前夜、オリーブ山のゲッセマネでの祈りは特に有名です。「イエスはひれ伏して祈っていわれた。」「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いでなく、みこころのとおりにしてください。」「イエスは苦しみにもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」（マタイ 5 1 : 3 9 ・ ルカ 2 2 : 4 2 ・ 4 4）この杯とは、イエスが十字架にかかることです。イエスはそれがどんな苦しみか分かっていました。

しかし、自分の願いでなく、神である父のみこころ＝計画を優先させてくださいと願ったのです。しかし、汗が血のように落ちるとは、たぶん汗がぽたぽたと血が流れるようにいう具合で（輸血を経験された方はどんな感じが分かれるとおもいます。）どんなすざましい状況だったのなののでしょうか。

3、イエスは例の山上の説教のなかで、祈りについてこのように話されています。「祈るときには、偽善者たちのようであってはなりません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立っているのが好きだからです。」「祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられる父に祈りなさい。」「祈るとき、異邦人のように同じことばをただくりかえしてはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれるとおもっているのです。」（マタイ 6 : 3 ~ 7）

さきほどのゲッセマネの森でのときにも、イエスは「あなたがたは、そんなに、1時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかつたのか。誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」（マタイ 2 6 : 4 0 ・ 4 1）祈りについて、数が多すぎるほど沢山の記事がありますが、聖書が祈りの書であることから当然といえるでしょう。

9-4 ヤベツの祈り

1、少し旧知に属するかもしれませんが、2001年より、日本の教会の一部でちょっとしたブームになっている、いや世界的なブームと言っているかわかりませんが、ことがありました。それが、「ヤベツの祈り」と言われているものです。すぐれた解説書も出回っていますが、ここでは簡単に紹介しておきましょう。

「ヤベツは彼の兄弟たちよりも重んじられた。彼の母は、『私が悲しみのうちにこの子を産んだから。』と言って、彼にヤベツという名をつけた。

ヤベツはイスラエルの神に呼ばわって言った。

『私を大いに祝福し、私の地境（じざかい）を広げてくださいますように。

御手が私とともにあり、わざわざから遠ざけて私が苦しむことのないようにしてくださいますように。』

そこで神は彼の願ったことをかなえられた。」

（第1歴代誌4章9～10節）

さきほどの、聖書の祈りの原則にあわせると「ヤベツの祈り」は以下のような感じでしょうか。

「ハレルヤ。愛する天の父なる神様、あなたを賛美します。

私を大いに祝福してください。

私の地境をひろげてください。

あなたの御手が私とともにありますように。

わざわざから遠ざけて、私が苦しむことがないようにしてください。

イエスの名前で祈ります。アーメン。」

2、この祈りの記事は、聖書のなかで、読みづらく、ある時は、ただページをめくる箇所、歴代誌といわれているものある箇所にあるのです。そしてそこに記録されている祈りなのです。別の表現をかりると聖書のなかにひっそりと、いわば隠れていたというべき祈り

りの記事なのです。この歴代誌は聖書の箇所でも、それを研究する方が神学校で学ばなければ、なかなか、よみづらい、理解しにくい箇所とも言われています。

それは名前の羅列で、なにか物語なり、歌なり、の記事が載っているわけではないのです。マタイの福音書にも冒頭、イエスの系図が載っており、それが、聖書を読みはじめるひとにとり困難な箇所になっているといいましたが、そんな比でなく、長々と人の名前が続いているからです。しかし、聖書の素晴らしさ、不思議さは、無駄な箇所が一か所もない、と言う意味においても凄いとした表現できない書物といっていいいでしょう。「この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。」(黙示録 22 : 19)。

3、「私を大いに祝福してください。」「私の地境（じざかい＝自分の所有地・自分の可能性の分野）を広げてください」とはなんと大胆な祈りでしょう。ともすれば、日本人は良い意味で謙譲心があり、悪い意味で、引っ込みじあんのところがありますが、私を祝福してください、と神に願うことがゆるされているとは。しかし、この祈りは当然、聖書の祈りとして十分に用いてくださいよ、いまから、日本人にはこのような祈りは必要なのですよ、という神からのプレゼントと理解することもできるでしょう。

神との契約関係にあれば、神に権利すなわち、請求がストレートにできるのです。私は祝福される権利があるということです。なんと大胆な宣言でしょう。そして祈りでしょう。こんなことがゆるされるのでしょうか？ヤベツの祈りの最後には、「そこで神は彼の願ったことをかなえられた」とあります。許されるのです。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ書 43 : 4) このように、個人個人のセルフイメージを大胆で、豊かなものにしなさいとも、聖書は教えています。このヤベツの祈りは大いに日本の教会でも用いられことでしょう。